

Title	狩野重賢画『草木写生』
Sub Title	Kano Shigekata's "SOMOKU SHASEI" (scrolls of flower paintings)
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 No.36 (2004. 9) ,p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	江戸時代に入って動植物への関心が高まるが，17世紀末までは本草家・博物家・園芸家などが作成した図譜は少なく，椿・菊など個別の園芸品の図譜（注1）を除けば，多くの種類を描いたものは百科図鑑の『訓きん蒙もう図彙』（1666刊，中村楊てき斎さい）や『五百介図』（1687頃成，吉文字屋浄貞）『草花絵前集』（1699刊，伊藤伊兵衛三之丞）くらいしか知られていない。そこで，17世紀に描かれた画家のスケッチが博物誌にとって有用な資料となる。たとえば，狩野探幽のスケッチ集『草木花写生』（果蔬草花図巻，東博蔵）については北村四郎の解説（注2）があり，トマトやカボチャなどの渡来品が描かれていることが記されている。その探幽の甥で幕府御用絵師だった狩野常信（木挽町狩野家二世）も『鳥写生図巻』『草花魚貝虫類写生』（ともに東博蔵）の2点を残しており，いずれも優れた博物誌資料であることを拙報ですでに報告した（注3・4）。これに類する資料に，国立国会図書館蔵『草木写生』があり，一応の調査を行なったので，本報でまとめておきたい。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20040930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

狩野重賢画『草木写生』

磯 野 直 秀

KANŌ Shigekata's "SŌMOKU SHASEI" (Scrolls of Flower Paintings)

Naohide ISONO

江戸時代に入って動植物への関心が高まるが、17世紀末までは本草家・博物家・園芸家などが作成した図譜は少なく、椿・菊など個別の園芸品の図譜（注1）を除けば、多くの種類を描いたものは百科図鑑の『^{きんもろう}訓蒙図彙』（1666刊、中村^{てきさい}惕斎）や『五百介図』（1687頃成、吉文字屋浄貞）、『草花絵前集』（1699刊、伊藤伊兵衛三之丞）くらいしか知られていない。そこで、17世紀に描かれた画家のスケッチが博物誌にとって有用な資料となる。

たとえば、狩野探幽のスケッチ集『草木花写生』（果蔬草花図巻、東博蔵）については北村四郎の解説（注2）があり、トマトやカボチャなどの渡来品が描かれていることが記されている。その探幽の甥で幕府御用絵師だった狩野常信（木挽町狩野家二世）も『鳥写生図巻』『草花魚貝虫類写生』（ともに東博蔵）の2点を残しており、いずれも優れた博物誌資料であることを拙報ですでに報告した（注3・4）。

これに類する資料に、国立国会図書館蔵『草木写生』があり、一応の調査を行なったので、本報でまとめておきたい。

1 資料の概略

国立国会図書館蔵『草木写生』（請求記号、別10-39）は白井光太郎旧蔵書だが、その由来や以前の所有者などは不明である（注5）。「春一上」「春一下」「秋一上」「秋一下」の全4軸から成り、いずれも題箋題は「草木写生」、紙幅は27.8cm。序文や跋文、識語は無く、「春一下」末尾に「草木写生／狩野織染藤原学翁画之」、「秋一下」末尾に「草木写生／狩野織染藤原重賢

〒232-0066 横浜市南区六ツ川3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Mar. 20, 2004]

●本稿では、引用文の漢字と仮名に現行字体を用い、濁点・句読点・振仮名を適宜加えた。引用文中の[]は磯野による注である。また、「東博」は東京国立博物館の略。

画之」の後書だけがある。ただし、印記は無い。目録は軸1・3にあるが、不完全である。また、「春」と「秋」があつて「夏」「冬」が無いが、本来存在しなかったのか、失われたのかは不明。

図はいずれも精巧な彩色写生画（注6）で、品名のほかに「万治三丁子年弥生廿五日、美州於加納^{かのう}写生」などと、写生年月日と写生地を注記するものが多い。写生年は明暦3年（1657）から元禄12年（1699）の約40年間にわたる。写生地はほとんどが美濃の加納である。

また、「花四方へ九つ或ハ八つ有之：葉サキ少トガル：木ノ体、枝ノ先ゴトニ如^{コレアリ}此花有、枇杷^{コノゴトク}ノ木ノ体ニ同」（001、シャクナンゲ：注7）や、「花色、若キ時ハ成程【いかにも】薄、古クナレバ次第ニ濃：桜花ノゴトク色有：葉色常菊ト同、菊香如山椒香、花カツギ^{ガク}【萼】常ニ同」（084、キクのうちの山椒菊）のように形状について注を記す例もあるが、多くはない。

この資料は写生図をのちに編集したらしく、同品はおおむね1ヵ所にまとめてある。たとえば、風車（028）の項には5品が描かれて、万治2年と同3年の日付が見られる。椿（024）は48品で、万治2亥年・寛文3卯年・年号不明の酉年の図が含まれている。

軸1・2（春）は写生年月日を記すものが大半で、それも万治2年（1659）の2・3月と翌3年の3月に描かれた図が圧倒的に多く、万治以外には寛文年間が2例と元禄年間が1例見られるだけである。これに対して、軸3・4（秋）は寛文3年（1663）と元禄5年（1692）が目立つほかは、明暦3年（1657）から元禄10年（1697）のあいだに散在している。なお、軸4では写生年を記す例が少ない。

項目数は軸1が29項目、軸2が54、軸3が18、軸4が30、計131項目。1項目に複数の品を含む場合があるので、全品数は284品となり、現在の分類基準では130種余となる。その詳細を稿末の表1に示すが、園芸植物と思われる種類が大多数を占め、それも美しい花を咲かせる種子植物で、マツやスギ、ヒノキのような針葉樹は一つも描かれていない。また、野草とみなせる品はオニタビラコ・タネツケバナ・ニガナ・キランソウ・ヘビイチゴ・イヌタデなどきわめて少なく、羊歯類やキノコ類は皆無である。農作物もダイコンとトウガンだけで、前述の狩野探幽および狩野常信のスケッチ集に、羊歯などを含めて数々の野草や農作物が描かれているとは、対照的である。

なお、本資料は前述の後書から狩野重賢（しげかた？）という画家のスケッチ集とわかるが、この作者の経歴はまったくわからず、生没年も不明である。ただ、その写生地のほぼ全点が美濃の加納（現岐阜市内）なので、何らかの形で加納藩と関係があった人らしい。もっとも、春之部で明確なように写生が特定の年に集中しているので、加納に常住していたとは思えない。つまり、同藩のお抱え絵師だった可能性は低い。

最近、松嶋雅人氏が17世紀前半に加納藩と関係があった絵師狩野宗眼重信について報告されている（注8）が、名に「重」が含まれているので、その親族の可能性もある。ただ、その重信自身の経歴も不明の点が多いらしい。

2 注目される記録

以下、本資料のうちで博物誌的に興味深い種類を取り上げる。配列は現和名の五十音順、見出しは現和名、() 内は原記載名と項目番号である。

- アサガオ (牽牛花・槿, 107~110) : 原産地は明確ではないが、中国を経て奈良時代に薬用として渡来、まもなく園芸品ともなった。原種は青花であるが、寛永8年(1631)に建てられた京都天球院の襖絵「籬に朝顔図」には白花も描かれているので、この頃までに突然変異で白花が出現したらしい。これに次いで生じたのが赤花で、本資料の元禄5年(1692)写生の赤紫色アサガオ(108)は、そのもっとも古い図と思われる。また、白花(110)も描かれているほか、濃青(107)と淡青(109)もあるので、青色にも変異が生じていたとわかる。
 - アラセイトウ (アラセイトウ, 042) : アブラナ科で、紫色の花が咲く。地中海沿岸原産で、古代ギリシア時代から薬草として使われ、16世紀頃に園芸品化されたという。これまでは、寛文4年(1664)序の『花壇綱目』に記載されたのが初出とされてきたが、本図譜の記録は万治3年(1660)で、『花壇綱目』より数年早い。もちろん、図はもっとも古いにちがいない。『地錦抄附録』(注9)は「寛文年間渡来」とするが、本資料により寛文年間より前に日本に入ったことがわかる。
 - ウコン (ウコン, 096) : ウコン (鬱金) は熱帯アジアの原産。その根茎を薬用ならびに食品用着色剤(たくわん漬用やカレー粉など)として用いるので、根茎は古くから輸入されていたと思われるが、生植物の渡来がいつか明確ではなかった。いままでは貝原益軒著『花譜』(元禄11年=1698刊)の記載によって元禄初年の渡来だろうとされてきたが、本資料の図は寛文2年(1662)の写生であり、渡来がさらに古いことが明確になった。
 - カザグルマ (風車, 028) : 野生種は白または淡紫の花被片(萼片^{がく})を8枚もち、中国や日本に産する。『地錦抄附録』(注9)には「正保年中(1644~48)以後渡り来ル」とあり、中国から園芸品が渡来したといわれるが、本資料には「青紫8弁、淡紫8弁、白6弁、白8弁、淡紫八重」と5品も描かれている。狩野常信の『草花魚貝虫類写生』にも、紫8弁・白8弁・淡青8弁・紫八重のカザグルマが見られ、すでに数多くの園芸品種があったことがわかる。
 - キク (084) : 中国の原産で、『万葉集』にはまったく登場せず、日本への渡来は奈良時代とされる。本図譜には菊37点が描かれており、大半が寛文3年(1663)の写生と思われる、そのうち34点に以下の花銘が記されている——大般若、キハシ、濡鷺、四条、南禅寺、実盛、大紫、濡鷺(前出とは異なる)、大和咲分(六代)、櫛、銀寄、賀茂物狂、大紅、大朽葉、大津咲分、大紫風車、朽葉風車、唐獅子、広島、山椒菊、金目貫、小紅、小紫、ワツパ、キンホウ、金テイ、銀目貫、星、花物狂、膽吹、ウスイ、ゴシヨカウ(御所紅か)、風車、金盞銀台。
- 江戸時代初期における菊の彩色図としては、東山潤甫画と伝えられる『画菊』(1691刊、注10)に100品が描かれており、狩野常信の『草花魚貝虫類写生』にも111品が所収されている。菊の品種は30年ほどで劣化して失われるとされるので、複数の資料にある品種名が同じでも、真に同一か否かは彩色図による比較が必要であり、本資料の花銘数はさほど多くないが、年代が明確であり、有用な記録の一つ。

- ギンモクセイ（モクセイ，124）：モクセイ（木犀）は中国原産で，室町時代に持ち込まれたらしい。キンモクセイ・ギンモクセイ・ウスギモクセイの3品がある。狩野常信の『草花魚貝虫類写生』に元禄16年（1703）写生のキンモクセイが含まれているが，ギンモクセイは本資料が最初かもしれない。ただし，残念なことに写生年は記されていない。
- コデマリ（小毬花，011）：バラ科の落葉小低木で，ユキヤナギやシモツケと近縁だが，この2種が日本にも産するのに対し，コデマリは中国産。17世紀前半の渡来らしく，『毛吹草』（1645刊，注11）に「小てまり」の名で初出するが，図は本資料にある万治3年（1660）の写生が最初と思われる。これに続いて，寛文4年（1664）稿の『花壇綱目』（注12）に「小手まり」の名，探幽の『草木花写生』に写生年不明の図，常信の『草花魚貝虫類写生』に寛文13年（1673）の写生図があり，さらに貞享元年（1684）刊の華道書『立華正道集』にも別名「すずかけ」で出るなど，多くの例が見出されるので，コデマリは急速に普及したらしい。
- シュウメイギク（秋メイ菊，122）：「秋明菊」の名であるがキク科ではなく，キンポウゲ科で，原産地は中国。「秋明菊」の名称は室町時代中期の文明本『節用集』に初出する。本資料の図には年記が無いが，古い図の一つ。別名貴船菊ともいうが，京都の貴船^{きぶね}あたりで多く栽培されていた故の命名かという。
- スルガラン（蘭，097）：スルガランは「駿河蘭」なので日本産のように思われるが，じつは中国南部・台湾などの原産。これまで渡来の時期がまったく不明だったが，本資料に明暦3年（1657）の大坂での写生図があるので，江戸時代の初期には持ち込まれていた。狩野常信の『草花魚貝虫類写生』にも写生年不明のスルガランの図がある。
- センダイハギ（センダイ萩，074）：「仙台萩」の名称は『毛吹草』（1645刊，注11）に初めて現われるが，本資料はそれに次ぐものと思われ，図は初出の可能性が高い。「萩」の名が付くが，一般のハギとは縁が遠い多年草で，黄色い花が咲く。「先代萩」と記すこともある。日本のほか，朝鮮やサハリンにも分布する。
- ツツジ類（躑躅・山躑躅^{ママ}・連花躑躅，007・009・012～015）：17世紀の後半にはツツジ・サツキ類が流行し，元禄5年（1692）には江戸染井の植木屋伊藤伊兵衛三之丞によってツツジ173品・サツキ162品の図譜『錦繡枕』（長生花林抄）が刊行されているが，それに先立つ万治2・3年（1659・60）に写生されたツツジ類計19品が本資料に収められている。著しい特徴をもつ場合を除き，この類を図から同定するのは専門家でないと無理なので，本報ではレンゲツツジ以外はすべて「ツツジ類」としたが，「リウキウ，江戸万葉，白桐嶋，薩摩，赤腰ミノ」などの花銘も記されており，流行が本格化しはじめたことが示唆される。
- ツバキ（024）：大半が万治2年・3年（1659・60）のスケッチ。総数は48品で，うち22品に以下の花銘が記されている——岐隼，ジャウドウシ，ヤハ物狂，雨ヶ下，八幡ボタン，大坂モツカウ，江戸大輪，飛入シンクリ，モジスリ，吉野シボリ，獅子，チン花，シカムラ，乱拍子，越前シボリ，小町，七面，ホンマザサラ，カナスギサンガイ，山茶，乱拍子（前出とは異なる），越前シボリ（前出とは異なる）。

古く『日本書紀』の天武13年（684）条に白椿が記録されているが，多数の品種が現われ

たのは江戸時代に入ってからであった。そのきっかけとなったのは第二代將軍徳川秀忠が椿を好んだことで、それ以来椿が大流行したといわれる。寛永7年（1630）に記された『百椿集』（注13）の著者安楽庵策伝の序文に、元和元年（1615）以降ツバキの品種が急速に増加したとあって、上記の言い伝えを裏付ける。

上記『百椿集』に続いて、寛永10年（1633）頃までに丹波篠山藩主松平忠国編『百椿図』（注14）が作成され、天和元年（1681）刊の『花壇綱目』（注12）には椿66品、元禄8年（1695）刊の『花壇地錦抄』（注15）に206品が記されている（この2書は図を欠く）。これらの資料の花銘と本写生画譜のそれとの比較が、今後の課題となる。

- ハナズオウ（蘇芳，056）：中国原産で、渡来は江戸時代初期という。正保2年（1645）刊とされる『毛吹草』（注11）に3月の季語として「蘇枋花」とあるので、これ以前に渡来したことが明らかだが、図としては本資料の万治3年（1660）写生図が初出かもしれない。
- フジモドキ（シケンシ，045）：記載名シケンシは「シケンジ」で、漢名「紫荊樹」（誤用）の訛りという。中国・台湾・朝鮮原産のジンチョウゲ科落葉樹で、春に咲く紫花の房を藤に見立てたのが現和名の由来。別名はサツマフジ（薩摩藤）なので、薩摩藩経由で日本に持ち込まれたといわれる。その時期は不明だったが、本資料の図は万治2年（1659）の写生で、従来の記録よりはるかに古く、江戸時代の初期に渡来したことが明らかになった。
- ミヤマヨメナ（春菊，044）：いま「春菊」といえば野菜のシュンギクに決まっているが、江戸時代の「春菊」はシュンギクのほかにミヤマヨメナを指す場合があった。時代はやや後になるが、近衛享楽院の『花木真写』（1736年以前の成立）の「春菊」もミヤマヨメナである（注16）。一方、シュンギクは「高麗菊」と呼ばれることが多かった。『花木真写』および狩野常信画『草花魚貝虫類写生』の「高麗菊」はシュンギクである。これに対して、『訓蒙図彙』（注17）の「春菊」の図はシュンギクであり、別名として「かうらいぎく」（高麗菊）を挙げている。このように混乱気味なので、図を伴わない場合の「春菊」はシュンギクとミヤマヨメナのどちらか断定できない。なお、シュンギクは地中海沿岸地方原産で、日本には江戸時代初期に渡来したらしい。一方、ミヤマヨメナは本州・四国・九州に産する種類で、ミヤコワスレと呼ばれるのはその栽培品種である。

3 近世渡来植物についての資料

室町時代から江戸時代初期にかけて中国や東南アジア、ヨーロッパなどから多くの草木が日本に持ち込まれた。その個々の種類について渡来時期を知るのに、本稿で取り上げた狩野重賢の『草木写生』、狩野探幽の『草木花写生』（注2）、狩野常信の『草花魚貝虫類写生』（注4）などのスケッチ資料が役立つことは前書きでも触れたとおりだが、ほかにも園芸書や辞書、往来物（書簡の形を借りた初等教科書）、俳諧書が役に立つ。たとえば、一条兼良の作とされる往来物『尺素往来』（注18）や、『日葡辞書』（注19）、俳諧書『毛吹草』（注11）、園芸書『花壇綱目』（注12）などである。ただし、これらは図や詳細な形態記述を欠くので、挙げられている品名が現在のそれと一致する保証は無く、たとえば『尺素往来』には「春菊」と記されている

るが、前節でも触れたように、それが現在のシュンギクか、それともミヤマヨメナであるかは決定できない。このような限界はあるが、これらの文字資料が有用であることは否めない。参考のために、上記の7点に記載されている渡来植物の概要を稿末の表2にまとめておく。

もっとも記載の多いのは狩野常信の『草花魚貝虫類写生』である。全29巻の大作で、しかも草木だけで26巻を占めるのだから当然といえるが、年記が明らかな事例が多い点とくに優れている。重賢の『草木写生』4巻と探幽の『草木花写生』2巻はこれより記載数をはるかに少ないが、それなりに『草花魚貝虫類写生』をよく補っていることが見て取れる。とくに『草木写生』には『草花魚貝虫類写生』に先行するスケッチがかなりある。

図の無い資料4件については、園芸書である『花壇綱目』の記載例が多いのは当たり前として、『毛吹草』がそれに匹敵することに注目したい。和歌や俳句はしばしば動植物を題材とするので、名称を調べるのに適している。その意味で、和歌では『万葉集』はもとより、『夫木和歌抄』(延慶3年=1310年頃成立)なども見落とせない。また、俳句は新しい事物を積極的に取り入れているので、渡来品などを調べる目的には欠かせない好資料である。

『日葡辞書』はイエズス会の宣教師が当時の口語を中心に収集した辞典で、他資料とは視点が異なるからか、初めて記録されたと思われる語彙が少なくない。たとえば、渡来草木では、ナタマメ、ビヨウ(ビヨウヤナギ)、マクワウリ、ユスラ(ユスラウメ)が初出。日本産の植物ではアオキ、ウラジロ、オトギリソウ、キクラゲ、クサノオウ、サギソウ、ナギナタコウジュ、ハマボウ、ヒガンザクラ、ヒョドリジョウゴ、ユキノシタなど、現和名につながる40ほどの植物名が初めて記録されている。菊の花銘らしい「曙、鷺毛、酔楊妃、太白、大般若、濡鷺」、桜の花銘と思われる「塩釜、大山木、普賢象」も収録されており、後者のうち「塩釜」は『草木写生』に描かれている「シホガマ」(023)と同品かもしれない。

4 まとめ

- (1) 写生図巻『草木写生』は、狩野重賢が主として美濃の加納で描いた図を編集したもので、写生年代は明暦3年(1657)から元禄12年(1699)にわたる。
- (2) 本資料には284品、現在の分類にして130余種が描かれており、その大半が春あるいは秋に花が咲く園芸植物である。同時代の写生資料である狩野常信画『草花魚貝虫類写生』(1661~1712)の約990品、約360種には及ばないが、約150種を所収する狩野探幽の画集『草木花写生』(1661~1674)に並ぶ。ただし、春・秋に花が咲く園芸品だけで、夏の花は無い。また、野草や農作物は少なく、針葉樹や羊歯、苔の類はまったく含まれていない。
- (3) 室町時代後期から江戸時代初頭に渡来した外来種がかなり多く含まれ、そのうちのアラセイトウ、ウコン、ギンモクセイ、スルガラン、フジモドキはそれぞれの渡来を示す資料としてもっとも古く、またコデマリとハナズオウは初出図と考えられる。そのほか、オウバイ、ゴジカ、トロロアオイ、ノウゼンカズラ、レンギョウなどの図も見られる。
- (4) ツバキは48品、うち22品に花銘があり、キクは37品、うち34品に花銘がある。ともに、写生年代が明確な資料として価値が高い。

- (注1) 『百椿図』(1633年頃までに成立, 松平忠国編:→注14), 『画菊』(1691刊, 東山潤甫:→注10), 『錦繡枕』(1692刊, 伊藤伊兵衛三之丞; ツツジ・サツキ) など。
- (注2) 影印本: 狩野探幽画『草木花写生』(北村四郎解説), 紫紅社, 1977年。
- (注3) 磯野直秀, 博物誌資料としての『鳥写生図巻』, MUSEUM, 584号, 2003年。
- (注4) 磯野直秀, 博物誌資料としての『草花魚貝虫類写生』, MUSEUM, 590号, 2004年。
- (注5) 国立国会図書館のホームページ (<http://www.ndl.go.jp>) の「和漢書・本草」に全巻の映像が収録されている。
- (注6) ツバキやキクなどでは, 一部だけ彩色した図や, 無彩色図もある。
- (注7) 本報では, 所収順に 001, 002…の項目番号を付した。
- (注8) 松嶋雅人, 岐阜市・光国寺所蔵「故事人物図押絵貼屏風」と狩野宗眼重信に関する二三の問題, MUSEUM, 579号, 2002年。
- (注9) 伊藤伊兵衛政武, 『地錦抄附録』, 享保18年(1733)刊: 翻刻本, 八坂書房, 1983年。
- (注10) 東山潤甫画, 『画菊』, 永正16年(1519)序, 元禄4年(1691)刊。国会図書館本を同館のホームページ(→注5)で閲覧できる。→問島由美子, 「画菊」(稀本あれこれ426), 国立国会図書館月報, 509号, 2003年。
- (注11) 松江重頼, 『毛吹草』, 正保2年(1645)刊: 翻刻本, 岩波文庫, 1943年。本書は百科全書の俳諧書で, 季語の章や, 産物を国別に記した章に多数の植物名を挙げており, 当時一般に用いられていた和名を知るには良い資料である。
- (注12) 水野元勝著『花壇綱目』は, 総合的園芸書の嚆矢で, 寛文4年(1664)序の稿本, 同5年序稿本, および天和元年(1681)の刊本があり, それぞれ内容が多少異なる。
- (注13) 安楽庵策伝著『百椿集』は, 『続群書類従』巻940に所収されている。図は無い。
- (注14) 松平忠国編『百椿図』は根津美術館が原本を所蔵しており, 図録『椿物語展』(安達瞳子編, 発行サンオフィス, 2003年)にカラーで収録されている。
- (注15) 伊藤伊兵衛三之丞, 『花壇地錦抄』, 元禄8年(1695)刊: 翻刻本, ①東洋文庫, 平凡社, 1976年(『草花絵前集』と合冊), ②八坂書房, 1983年(『増補地錦抄』と合冊), ③日本農書全集54, 農山漁村文化協会, 1995年。
- (注16) 近衛家熙(予楽院)画, 『花木真写』, 成立年未詳(家熙は1736年没): 影印本(北村四郎解説), 淡交社, 1973年。「春菊」がミヤマヨメナ, 「高麗菊」がシュンギクであることを, 北村が解説している。
- (注17) 中村惕斎著, 『訓蒙図彙』, 寛文6年(1666)刊: 影印本, 『訓蒙図彙』(近世文学資料類従・参考文献編4), 勉誠社, 1976年。増補本は, 内容がかなり異なる。
- (注18) 一条兼良著『尺素往来』は1481年(兼良の没年)以前の成立で, 『群書類従』巻141に所収されている。
- (注19) 土井忠生・森田 武・長南 実 編訳, 『邦訳日葡辞書』, 岩波書店, 1980年。森田武編, 『邦訳日葡辞書索引』, 岩波書店, 1989年。

表1 『草木写生』の一覧(「」は原注)

軸1:春-上

番号	記載名	写生年月日	現和名	備考(花色など)
001	シヤクナング	元禄12・2・25	シヤクナゲ	もっとも遅い日付
002	リンドウ	3・7	ハルリンドウ	
003	梅, 4品	1・14他	ウメ	豊後梅など
004	ヲダマキ	万治3・3・25	ヤマオダマキ	
005	唐桃, 4品	万治2・3・11	モモ	白一重・八重, 赤一重・八重
006	李	寛文5・3・4	スモモ	白一重
007	躑躅, 2品	万治2・3・7	ツツジ類	桃八重, 赤一重
008	——	万治2・3・8	テマリバナ	
009	躑躅	万治2・3・8	ツツジ類	桃一重
010	イヌ毬花	万治2・3・7	ヤブデマリ	
011	小毬花	万治3・3・26	コデマリ	
012	山躑躅, 3品	万治2・2・15	ツツジ類	桃一重, 赤一重・八重
013	連花躑躅, 2品		レンゲツツジ	赤, 朱赤
014	黄連花躑躅		キレンゲツツジ	黄白色
015	ツツジ, 10品		ツツジ類	リウキウ, 江戸万葉, 白桐嶋, 薩摩, 赤腰ミノ, 無銘5
016	ニハ桜	万治3・3・8	ニワザクラ	淡桃八重
017	海紅・カイトウ		ミカイドウ	
018	桜, 9品	万治2・2・11他	サクラ	タイサンブクン(泰山府君), 姥桜, 山桜, 毬花桜, 糸桜ほか
019	庭桜		ニワザクラ	白八重
020	リンゴ, 3品	寛文3・3・25	ワリンゴ	白一重・八重, 桃一重
021	——	万治3・3・9	ヤブコウジ	
022	密ミ	万治3・3・9	シキミ	
023	シホガマ [花銘]		サクラ	淡紅八重
024	椿, 48品	万治2・2・21他	ツバキ	花銘→第2節・ツバキ
025	ゲンゲ, 2品		レンゲ	紅, 白
026	草牡丹		ヤマシヤクヤク	
027	牡丹, 12品	万治2・3・7	ボタン	花銘なし
028	風車, 5品	万治2・3・7他	カザグルマ	青紫8弁, 淡紫8弁, 白6弁, 白8弁, 淡紫八重
029	小杜若		ヒメシヤガ?	

軸2:春-下

番号	記載名	写生年月日	現和名	備考(花色など)
030	アザミ	3・23	オニタビラコ	
031	タンコハナ		タネツケバナ	
032	鳶尾, シヤカ	万治2・3・13	シャガ	
033	三枝九葉草	万治3・3・13	イカリソウ	淡紫色
034	桜草	万治3・3・13	サクラソウ	
035	三枝九葉草	万治2・2・10	イカリソウ	白花
036	沢チシヤ	万治3・3・28	サワオグルマ	
037	コブシ	万治2・2・28	シデコブシ	

038	木蘭	万治2・3・12	シモクレン	
039	堇		スマレ (種名)	
040	堇	万治3・3・10	タチツボスマレ	
041	堇	万治2・4・18	ツボスマレ	「スモウトリグサ」*
042	アラセイトウ	万治3・3・20	アラセイトウ	紫花
043	アヅマ菊	万治3・3・10	アズマギク?	白花
044	春菊	万治3・3・22	ミヤマヨメナ	白花
045	シケンシ	万治2・2・11	フジモドキ	淡紫
046	山吹, 2品	元禄5・3・11	ヤマブキ	一重, 八重
047	ニガナ	万治3・3・23	ニガナ	
048	丁字草	万治3・3・23	チョウジソウ	
049	蒲公英	万治2・2・18	タンポポ	黄花
050	蒲公英	寛文3・3・28	シロタンポポ	
051	キンポウゲ, 2品	万治3・3・8	ウマノアシガタ?	一重, 八重
052	アヲキハ	万治3・3・10	アオキ	
053	白藤	万治2・3・8	ノダフジ	白花, 基部から開花
054	藤	3・25	ノダフジ	淡紫, 基部から開花
055	イヌハッカ	万治3・3・20	オドリコソウ	白, 「ゴマハッカ」
056	蘇芳	万治3・3・20	ハナズオウ	
057	梨花, 2品	万治2・3・18	ナシ	白一重, 白八重
058	枳殻	3・25	カラタチ	
059	覆盆子	3・24	ニガイチゴ	
060	木瓜	3・17	ボケ	白一重
061	唐木瓜	元禄5・2・29	ボケ	紅一重
062	木瓜	万治2・2・11	ボケ	朱一重
063	カハホネ・アサザ	万治2・3・6	コウホネ	
064	石瓜, ウリノ木	万治2・3・8	?	5弁小白花
065	キラン草	万治2・2・19	キランソウ	
066	蛇莓	万治2・2・19	ヘビイチゴ	
067	桃	2・12	モモ	紅一重
068	ココメ花	万治2・2・12	ユキヤナギ	
069	スズカケ	万治2・2・21	シジミバナ	
070	カミノキ		コウゾ	
071	カマツカグミ	万治3・3・29	ウシコロシ	現別名カマツカ
072	九輪草, 七重草	万治2・3・13	クリンソウ	
073	ヤブゼリ	万治3・3・20	ムラサキケマン?	蕾の時期
074	センダイ萩	万治2・3・6	センダイハギ	
075	シシノヲササ	万治2・3・6	アマドコロ	
076	レンキヤウ	4・22	レンギョウ	
077	馬酔木	1・18	アセビ	
078	黄耨	3・9	オウバイ	
079	茶	3・20	トチノキ	
080	通草, アケビ	万治2・4・12	アケビ	
081	大根花, 2品	万治3・3・26	ダイコン	紫, 白
082	クミノ花	万治2・3・9	グミ類	白花
083	チシヤノ木, 売子木	万治2・3・8	チシヤノキ	

末尾 「草木写生／狩野織染藤原学翁画之」

*堇 (041, ツボスマレ) の別名として「スモウトリグサ」(相撲取草) を挙げる。これは子供2人が花の茎を引っかけて引き合い, どちらの茎が切れるかを競う遊びに由来する。この遊びをする草には, スマレ, オオバコ, オグルマ, オヒシバ, ナズナ, メヒシバなどがあり, 「相撲草, 相撲取草, 相撲取, 相撲花, 相撲取花」などの別名があったという (木村陽二郎監修, 『草木名彙辞典』, 柏書房, 1991年)。

軸3：秋－上

番号	記載名	写生年月日	現和名	備考（花色など）
084	菊, 37品	寛文3・9・30	キク	花銘→第2節・キク
085	ノウゼンカヅラ	明暦4・7・1	ノウゼンカヅラ	
086	桔梗*, 6品	明暦4・7・1他	キキョウ	白八重2, 淡青一重, 淡青八重, 青紫一重, 白・青染分け
087	黄蓮	元禄5・7・10	トロロアオイ	
088	芙蓉, 3品		フヨウ	白, 桃, 白・赤交り
089	ナデシコ類, 5品	元禄5・7・2他	ナデシコ類	仙翁花3, 松本, 節黒
090	ムクゲ, 8品	万治3・7・2他	ムクゲ	
091	高麗梔		クチナシ?	八重
092	栗雪	寛文3・9・20	トリアシショウマ	
093	鷺草	8・2	サギソウ	
094	白き節黒	寛文2・8・2	ナデシコ類	白5弁
095	マンジュシヤゲ	8・5	ナツズイセン	
096	ウコン	寛文2・7・26	ウコン	
097	蘭*	明暦3・7・9	スルガラン	もっとも早い日付
098	女郎花	8・3	オミナエシ	
099	ゴシ花	8・5	ゴジカ	
100	——*	寛文1・7・19	ハマボウ	
101	ナス		ナス (丸ナス)	

*086桔梗のうち白八重と, 097蘭と100無名には, 「大坂にて写生した」旨を記す。

軸4：秋－下

番号	記載名	写生年月日	現和名	備考（花色など）
102	沢桔梗	8・22	ミズアオイ	
103	クス	7・4	クズ	
104	活楼		キカラスウリ	
105	苦瓠	元禄5・7・28	ユウガオ	
106	冬瓜	元禄5・7・2	トウガン	
107	槿	元禄6・6・24	アサガオ	濃青
108	牽牛花	元禄5・6・23	アサガオ	赤紫
109	槿	6・20	アサガオ	淡青
110	牽牛花	7・2	アサガオ	白
111	ハス	7・13	ハス	淡紅
112	ヒルモ	8・22	ガガブタ	
113	沢蓼	8・22	サクラタデ	
114	水蓼	7・29	オオケタデ	
115	犬蓼	7・29	イヌタデ?	白花
116	夏蓼	元禄5・6・5	イヌタデ?	赤花
117	未花	8・21	ヒツジグサ	未=ヒツジ
118	鳥甲	8・18	ヤマトリカブト?	
119	鶏冠花, 2品	7・26	ケイトウ	赤, 白・桃・黄交り
120	水引	8・23	ミズヒキ	
121	秋海棠	8・21	シュウカイドウ	
122	秋メイ菊	8・28	シュウメイギク	
123	花蓬	8・29	マツムシソウ	
124	モクセイ	8・10	ギンモクセイ	

125	犬毬花	寛文3・8・22	ガマズミ類	
126	ドングリ	寛文3・8・22	コナラ実	
127	ユミナヅル	元禄10・10・14	ツルウメモドキ	
128	水仙	1・18	スイセン	一重
129	山茶花, 3品	10・21	サザンカ	白一重・八重, 赤一重
130	茶		チャ	
131	枇杷	10・20	ビワ	
末尾 「草木写生／狩野織染藤原重賢図之」				

表2 室町時代～江戸時代初期の渡来植物

図の無い資料：○は該当資料に所収されていることを示す。

図を伴う資料：西暦は写生年を，●は写生年不明の場合を示す。

文献／刊年・成立 年・写生期間 ⁽¹⁾	図の無い資料				図を伴う資料		
	尺素 往来 1481	日葡 辞書 1603	毛吹 草 1645	花壇 綱目 1664	狩野重賢 草木写生 1657～1699	狩野探幽 草木花写生 1658～1674	狩野常信 草花…写生 1658～1712
現和名（五十音順）							
アラセイトウ				○	1660		1671
イチジク							1696
イチハツ		○	○	○			●
インゲンマメ （フジマメ）						●	
ウコン ⁽²⁾					1662		1680
エニシダ							1698
オウバイ			○	○	●		1667
オシロイバナ							●
カイドウ （ミカイドウ）	○	○	○		●		1684
カザグルマ ⁽³⁾			○	○	1659	●	1696
カーネーション （あんじゃべる）				○			●
カボチャ		○ ⁽⁴⁾				●	●
カラユリ				○			1703
カリン							1706
キササゲ							1676
キンセンカ	○	○	○	○		●	●
ギンセンカ							1673
キンモクセイ ⁽⁵⁾							1703
ギンモクセイ					●		
ケマンソウ	○	○	○	○			●
コウオウソウ ⁽⁶⁾				○			●
ゴジカ			○	○	●	●	
コデマリ			○	○	1660	●	1673
コノテガシワ							1696
サツマイモ							1701
サルスベリ			○				1682
サンザシ							1696
サンシチ（三七）				○		●	1679
サندانカ							1706
シナガワハギ							1676
シュウカイドウ				○	●		●
シュウメイギク				○	●	●	
シュンギク ⁽⁷⁾						●	●
ジンチョウゲ	○	○	○				1674
スルガラン					1657		●
ゼニアオイ ⁽⁸⁾			○	○		1662	●
センニチコウ				○			●
ソラマメ		○ ⁽⁹⁾					1708

文献／刊年・成立 年・写生期間(1)	尺素 往来 1481	日葡 辞書 1603	毛吹 草 1645	花壇 綱目 1664	狩野重賢 草木写生 1657～1699	狩野探幽 草木花写生 1658～1674	狩野常信 草花…写生 1658～1712
タケシマユリ				○			1703
タチアオイ	○		○				●
タバコ			○				1675
ダンドク				○			●
チャラン							1680
チョウセンアサガオ							1672
ツルムラサキ							●
ツルレイシ							1682
テッセン			○	○		●	
テッポウユリ							●
トウガラシ			○			●	
トマト						1668	1703
トロロアオイ			○ ⁰⁰		1692	●	1666
ナタマメ		○	○				1674
ナツズイセン					●		●
ニンジン (野菜)			○			●	1671
ハクチョウゲ			○				1703
ハナズオウ			○		1660		1674
ヒギリ (緋桐)							1668
ヒマワリ				○			1667
ビヨウヤナギ		○	○			●	●
フジモドキ					1659		1710
ブッソウゲ							1706
ホウセンカ	○		○	○			1675
マツリカ							1700
マルメロ			○				1667
ユスラウメ		○					1661
ルコウソウ			○				1671
レダマ			○	○		●	1667
レンギョウ					●	●	●
ロウバイ						●	1667
ローズマリー							1680

- (1) 『草花…写生』は『草花魚貝虫類写生』の略。『尺素往来』は著者一条兼良の没年、『花壇綱目』は寛文4年(1664)序の稿本(カラユリのみ刊本による)、図を伴う資料はそれぞれの写生期間を表示した。
- (2) 『日葡辞書』には「ウコン」があるが、注釈に「葉となる根」とあり、生植物ではないので記載していない。
- (3) カザグルマは日本にも産するが、『地錦抄附録』によれば江戸時代初期に園芸品が渡来した。
- (4) 『日葡辞書』で、「ユウガオ」に対するポルトガル語はAbobara(カボチャ)となっている(青葉 高、『野菜の日本史』, 八坂書房, 1991年)。
- (5) 『尺素往来』では「桂花」(モクセイ類の漢名)が挙げられ、『日葡辞書』と『毛吹草』には「モクセイ」の名があるが、キンモクセイか、ギンモクセイかは不明。
- (6) コウオウソウ(紅黄草)はフレンチ・マリーゴールド。

-
- (7) 第2節で記したように、「春菊」はシュンギクかミヤマヨメナか決めがたいので、図が無い資料4件では記載していない。
- (8) 『毛吹草』と『花壇綱目』では、ゼニアオイの江戸時代の別名「小葵」を採録した。
- (9) 『日葡辞書』では、「トウマメ」に対してポルトガル語のソラマメを充てている。
- (10) 9月の季語「とろろの花」を採録した。